

である。これにより「百病」と「風」の関係が浮き彫りになるのがわかる。

「分解」とは、『内経』各編の内容を合わせて理論面と臨床面に大別、さらに陰陽、五行、天地人、養生などの内容を原文のまま抽出し整理したものである。これは先の「成句」では検索、抽出不可能な〈内容〉からの引用抜粋で、古典を読み込んでいないとこの整理は不可能である。本書では、(1) 天地人、(2) 陰陽、(3) 四時・四季、(4) 五行・臓腑、(5) 養生・人の一生の5項目をまとめてある。

『神農本草経』では39の表解、15の図が紹介され、それぞれの解説がされている。

本書は以上のような構成になっているが、この「表解」を見たときに、鍼灸を学ぶものは『鍼灸神髓』(代田文誌著)にある「五臓之色体表」と「十二原之表」(『難経鉄鑑』より引用)、学校教科書の「手足の十二経脈と井榮俞経合の表」「相生相尅の図」などを思い浮かべるのではないだろうか。逆に言えば、その程度しか、表解がされていないのを感じてしまう。参考までに、江戸中期の難経解説書『難経鉄鑑』(広岡蘇仙著)にある「難経図」などは、一難から八十一難までことごとく表形式、図形式にまとめられていて、読む者の理解を助けてくれる注釈本である。

「成句分類」としては、江戸の考証学者・山田業

広が『内経』・『難経』の内容を項目ごとに分類編纂した『医経声類』(1868年)がその先駆的な文献であろう(完成までに21年を費やした)。吉元先生が本書完成までどれだけの時間を要したかは分からないが、山田業広と同じく、相当の年月と情熱を注いだことであろう。

本書の中で吉元先生は「一度、『素問』『霊枢』を分解し、掃除して、分類してみたらかねがね思った。(略)——或る学会で『素問』『霊枢』の分解を提案した事もある。しかしその後も反応なく、それでは自分で一つしてみようとおもった。それが字句、表解と今回の成句分類になった。」と述べている。これは著者が本書の執筆動機を淡々と述べているようであるが、私達読者へのさらなる研究、発展を希望する強烈なメッセージではないだろうか。方法論は述べた、あとは君たちも頑張れ、と言っているように感じられる。本書は、理論部分を中心にまとめられているが、臨床部分は未着手である。この労作は中国医学古典の基礎理論を学ぼうとする人、また古典をもう一度整理して読み直したい読者には、強くお勧めする次第である。

(小林 健二)

[医聖社、〒101-0065 東京都千代田区西神田2-7-4 島崎ビル6F、TEL. 03 (3264) 8639、2016年7月、B5判、171頁、3,800円+税]

書籍紹介

日本薬史学会 編, 奥田 潤・西川 隆 編集代表

『薬学史事典』

日本薬史学会は、日本医史学会とは浅からぬご縁がある。毎年12月には医療系の歴史の6つの学会が合同で例会をもち、その編集長と学会代表が集まって編集者会議も行っている。その日本薬史学会が総力を挙げて薬学の歴史を俯瞰する巨大な労作『薬学史事典』を刊行されたことは大いに敬意を表するものである。

薬学の歴史と医学の歴史とはたがいに深く関わっている。実際『薬学史事典』の内容を見ると、薬学の歴史だけでなく、医療の歴史についても少なからぬ頁を割いている。

日本の薬学史：総論(6項目)、各論(125項目)

日本の医療史：各論(28項目)

外国の薬学史：総論（10＋1項目）、各論（46項目）

外国の医療史：各論（39項目）

巻末の付録：年表、博物館・資料館など一覽、索引

薬学の歴史を考えるとときに、その時代の医療との関わりを無視することができないのはもちろんだが、医学が薬剤の進歩と深く関わりながら発展してきたことには、意外なほどに注意が払われていない。

西洋医学は19世紀に入ってから大きく変貌し、基礎医学と臨床医学に分かれて急速にかつ加速度的に進化し、現代の先進的な医療が生み出された。その19世紀の医療・医学の変革については、かつてフーコーが「臨床医学の誕生」と表現し、病理解剖学と実験生理学の発展といったモーメントが指摘されている。しかしながら、18世紀までの西洋医学で用いられていた薬剤は、他の伝統

医学と同様にもに植物薬であった。植物から薬効成分を抽出する試みは、18世紀末のジギタリスから始まり、19世紀初頭あたりから本格化してさまざまなアルカロイドが抽出され利用されるようになった。さらに有機化学の発展に伴い、19世紀末からアスピリンを始めとする化学合成薬が開発・販売されるようになった。薬理学の祖とされるシュミーデベルク Schmieberg, Oswald (1838–1921) がシュトラスブルク大学に薬理学研究室を設立したのは1887年である。抽出・精製ないし化学合成により作られて純粋な成分からなる薬剤と、薬理学によるその作用の検証なくして、現代医学が成り立たないことは言うまでもない。

本書『薬学史事典』が医史学を研究する人たちにも有用な情報源であることの出縁である。

(坂井 建雄)

[薬事日報社、〒101-8648 東京都千代田区神田和泉町1番地、TEL. 03 (3862) 2141, 2016年3月、B5判、880頁、12,000円＋税]

川端美季 著

『近代日本の公衆浴場運動』

近代日本の都市の公衆浴場に関する本格的な研究である。いわば風俗史・文化史的関心から、江戸時代に庶民の養生や社交の場として栄えた湯屋が紹介されることはこれまでもあったが、本書では明治から大正にかけての公衆浴場について、文化史的側面のみならず、法的、経済的、社会的そして保健衛生の側面にも目を配りながら、興味深い歴史が描かれている。江戸時代からの連続性の一方で、西洋の public bath 運動からの影響についても言及されている。

本書の後半では、大阪・京都・東京の3都市における公設浴場が取り上げられ、救済や部落改善運動などとも関わる都市政策・社会事業としての重要性が、その問題点とともに明らかにされている。東京における関東大震災後の仮設浴場にかんする分析を読むと、現在においても震災後の対応として罹災者の入浴の問題が重要であることに

いて考えさせられる。

医史学的関心からは、石黒忠憲（陸軍軍医総監）をはじめとする医師たちの入浴の効用・効能にかんする見方や、細菌学興隆以降の明治後期になると、公衆浴場の水質にかんする懸念が『大日本私立衛生会雑誌』において議論されていることなどが、とくに興味深い。

以下に目次を紹介しておこう。

序章

- 第一章 湯屋の法規制の変遷—江戸期から明治期を中心に
- 第二章 清潔にする場としての浴場—衛生的側面の導入
- 第三章 社会事業としての公衆浴場—日本における公設浴場の成立
- 第四章 社会事業行政における公設浴場の位置